

大学へのソーシャルワーク導入の意義

家族・地域支援学科 牧野 晶哲, 杉本 豊和

はじめに

2011年度の本研究は、昨年度の大学へのソーシャルワーク導入の現状と意義に関する報告に引き続いて、導入後の効果を実際の事例から検討することを目的とし、日本学校ソーシャルワーク学会でのキャンパスソーシャルワークに関する事例と、キャンパスソーシャルワークの先駆的な実践を行なっている日本福祉大学への訪問と聞き取り調査を実施した。以下その内容を報告する。

1 日本学校ソーシャルワーク学会での知見

2011年11月19日～20日、福岡県福岡市早良区にある西南学院大学にて日本学校ソーシャルワーク学会が開催された。参加理由として、わが国においてはまだ数少ないキャンパスソーシャルワーク（以下CSW）に関連する研究発表、並びにシンポジウムが予定されているためである。またCSWer等と意見交換をすることで、本研究の目標である本学での導入に向けて、より具体的に検討できると考えたからである。それでは自由研究発表とシンポジウムの内容¹について簡単に紹介する。

1) 自由研究発表

南九州大学の林典生氏からは「園芸活動を媒介にした大学生生活支援実践」という報告があった。南九州大学はわが国の私立大学としては1校しかない環境園芸学部を有する大学である。学生の中には、社会性及びコミュニケーションの面で教職員や学生間でのトラブルを起こす者もあり、学生部が中心となり対応を検討していた。まず大学内では、学生支援に携わる担当職員によるケース会議を開催し、情報を共有して一体的な支援を行っ

た。次に外部の機関・団体や住民と連携しながら園芸活動を行うことで学生の有用観が高められ、卒後の進路選択にも大きな影響を与えた実践報告がなされた。まだ個別ケースの段階であり、大学の特色も含まれているため汎用できるものではないが、地域の社会資源を活用する支援は大変参考になった。

また国立精神・神経医療研究センターの長沼洋一氏、首都大学東京都市教養学部の長沼葉月氏からは「学生支援における大学ソーシャルワーカーの業務確立プロセスに関する研究」の報告があった。全国調査の結果として、主なものだけ列举するが、配置している大学は32校だが、福祉・心理・教育系学部を設置していない大学では3.7%に対し、設置している大学では11.2%と3倍ほどの開きがある。またCSWerを配置しない理由は『予算が不足している』が最も多いが、福祉・心理・教育系学部の設置がない大学ではCSWerへの理解がされていないことが明らかとなった。CSWerの役割としては、『学生及び家族との総合的個別相談』『精神障害のある学生支援』『発達障害のある学生支援』が最も多かった。その他にも『欠席が多かったり留年した学生やその家族に対する支援』『学生対応に悩む教職員へのコンサルテーション』『学内の相談部門の連携・調整』も中心的な役割として挙げられていた。学生の抱える様々な生活課題に対して、個別の相談部門の充実を図ることも重要であるが、まずは大学内の支援窓口が有機的に連携する必要がある。また家庭との連携、さらには社会資源の活用などにおいてCSWerが機能することが調査結果からも伺うことができた。

2) シンポジウム

「大学におけるキャンパス・ソーシャルワークの現状と展望」というテーマの下、沖縄大学の名城健二氏（司会）、四国学院大学の詫間佳子氏、日本福祉大学の國中咲枝氏から実践報告、また淑徳大学の米村美奈氏からはCSWerからの聴き取り調査結果の報告がされた。まず各大学における取組については別添資料を参照していただきたいが、それぞれの大学ごとに抱えている課題に対応するためCSWerの配置に繋がっていることが分かる。また昨年度の年報ⁱⁱでも報告させていただいたが、実践活動において学生への個別支援以外の取り組みについては、CSWerのキャリアによっても大きく異なってくる。しかし共通しているのは、ソーシャルワークの定義にも示されている「人と環境と相互に影響し合う接点に介入」している点であり、学生だけでなく家族や教職員、さらには行政機関・医療機関・高等学校等を含む社会資源とも連携を取りながら支援を進めている。

続いて、米村氏が2010年度に行ったCSWerからの半構造化面接での聴き取り調査（10校）を踏まえた報告があった。こちらの報告で特徴的なものとしては、CSWerが保有している資格は社会福祉士と精神保健福祉士を両方取得している者が最も多く、学生のメンタルヘルスについてはどこの大学でも苦慮していることの表れかと思う。また勤務形態としては非常勤雇用が9校であるが、勤務日数は週5日が6校であり、日常的に相談を請け負える体制の確保は必要であると考えられている。そして大学全入時代を迎えた昨今、学生にとって最後の教育機関としてできることは生活力を身につけてもらうことも大きな課題となっており、CSWerも対人関係に悩み、大学内に居場所が見つけられず、引きこもりに近い状態で過ごしてしまう学生への支援の必要性を痛感していることが分かった¹⁾。

2 日本福祉大学におけるキャンパスソーシャルワーク

2012年2月21日に日本福祉大学学生相談室を訪問し、専任カウンセラーの若山隆さんとソーシャルワーカーの國中咲枝さんにお話を伺った。

1) ソーシャルワーカー配置の経過

日本福祉大学がソーシャルワーカーを配置したきっかけは、大学が社会からの新しいニーズに対応することが求められると同時に、入学してくる学生のニーズや抱えている課題が多様化、深化したことだと捉えることができる²⁾。当時、日本福祉大学ではキャンパスにおける学生の「生活の場」という視点の重視から、「大学コミュニティづくり」にとりくみ始めたことと、それまで保健室や相談室を統括してきた学生相談保健委員会の発展形としての「相談保健センター」構想がその端緒となっていると捉えられる。その構想の中に「ソーシャルワークの位置づけとスタッフの充実」が含められ、常勤のソーシャルワーカーの配置が求められた。現在の活動状況に関しては、昨年度の報告書に記してきたところである³⁾。

2) ソーシャルワーク導入の効果

日本福祉大学でのソーシャルワーク導入の効果を一言で述べることは難しいが、それまでの心理学を中心としたアプローチからソーシャルワーク視点を明確化したことによって、予防、コミュニティワーク、環境へのアプローチなどが業務の内容として正式に位置づけられ、相談援助業務の幅が広がり、総合的な支援が可能になったことがあげられる。また、大学コミュニティづくりを継続的に実施する人的保障ができたことや、保健師や臨床心理士を含む協同、連携を確保すること、地域の精神保健活動との連携、修学支援へのコーディネート、コミュニティづくりやピアサポートの実施におけるソーシャルワーカーの貢献もあげられている⁴⁾。

3) 今後の課題

今後の課題を伺ったところでは、新しいニーズ

をもった学生への支援があげられた。それは、ひとつには発達障害や精神障害、知的障害がある学生や、個別の発達課題を持った学生への支援である。昨年の報告書³⁾でも述べたが、大学希望者の全入時代にあって、これまでとは異なる層の学生が入学するケースがある。そこでの大学のあり方、支援の目的と方策が模索されていることを知ることができた。

まとめ

今年度、他大学におけるCSW実践を学ぶ中で、CSWにおいて2つのテーマを突きつけられた。その一つは「大学とは何か」という問いであり、もう一つは「CSWは何をめざすのか」という問いである。

これまで述べてきたように、大学に様々なニーズを持って入学してくる学生の多様性については、その存在を否定することは現実的ではない。大学への公的な補助金が削減され、競争原理が持ち込まれる中において、大学は経営という視点を無視あるいは軽視することができなくなった。若年人口の減少とも相まって、これまでとは異なるニーズを持った学生が大学に入学してきている。大学とは、学問・研究を柱にそこで学ぶ学生の知識・技術・教養を修得する場所であると思われる。しかし、社会が多様化し、家族・家庭が崩壊し、学校教育が硬直化する中において、現代青年の一部は十分な発達の機会を得ないまま最終の教育機関である大学の門をくぐる。大学はそれまでもそうであったが、今はそれまで以上に20歳前後の青年から大人になる時期の適切な経過（発達の抵抗）を求められていると思われる。そういう時代において大学は、そうした学生への支援を、大学の経営という視点からも現代的な役割という視点からも求められている。

そこではいうまでもなく（学問を柱にしたものだけでなく）全人間的で全体的な支援が求められる。本来依拠するはずだった家庭や地域社会は、必ずしもそうした役割を十分に果たせなくなって

いることも大きな要因である。

「大学とは何か」という問いに対する解答は大学によって異なるであろう。しかし、その大学が前述のような機能を持たなければ大学として存立していくことが難しくなるのであれば、それに対する支援を行うしかない。それは今までも、例えば本学を例にあげれば、学生委員会、学生人権擁護委員会、学生課、保健センター、学生相談室、そしてクラス担任やゼミ担当教員が個別に実施してきた内容もある。それらを総合的な視点で、多様な方法によって、なおかつ関係機関・部署の連携をすすめながら実施できるのがキャンパスソーシャルワーカーであり、キャンパスソーシャルワークなのだと思えることができる。

謝辞

本調査研究にご協力いただきました日本福祉大学國中咲枝氏と若山隆氏に心より御礼申し上げます。なお、本調査研究は本学教育・福祉研究センターの助成金を得て実施しました。

引用文献

- 1) 「日本学校ソーシャルワーク学会 第6回全国大会 大会資料」(2011)
尚、本報告では大会資料並びに会場における配布資料を引用、参考にしている。
- 2) 日本福祉大学 野中猛「スクールソーシャルワークをめぐる研究報告書」(2010) p34-37
- 3) 白梅学園大学短期大学教育・福祉研究センター「研究年報」No.16 (2011) 牧野晶哲、杉本豊和「大学ソーシャルワークの可能性に関する試行的研究」p77-82
- 4) 前掲書「スクールソーシャルワークをめぐる研究報告書」(2010) p54-59